文字・表記（理論・現代）

佐藤稔

一、著書

この期に刊行された文字・表記関係の著書は、主題に漢字を据えたものが目立った。それだけ漢字に向けられる関心が相変らず高いということなのであろうが、問題意識も扱い方も各人各様で、特に時流に乗じて一方向に偏するというような傾向は認められなかったと言ってよい。

今期第一の収穫としては、犬飼隆『上代文字言語の研究』（笠間書院、92・2）を挙げたい。先期の展望で紹介された「「文字言語」の研究課題」を終論に据え、序論には「文字言語機能観」を配し、四部の構成をとった本論が示されている。「漢字を日本語の音節文字につくりかえる」「万葉仮名で日本語の語形を書きあらわす」「漢字を日本語の表語文字につくりかえる」「万葉仮名で日本語の文を書きあらわす」というようにタイトルが付された本論には、文字言語として有意な事象を、文字レベルから語表記・文表記・文章表記の段階まで、それぞれに応じて論ずるという態度が保持されている。これは単発論文として読んだ折には気づかなかった有機性であった。著者のような規模の大きいパースペクティブに一貫して支えられている研究が現代の表記研究の分野に実現することの必要を痛感した。

杉本つとむ『文字史の構想』（萱原書店、92・2）は、既発表論文に新規執筆の三篇を加え、著者年来の研究をまとめたものである。この領域への興味深い案内にもなっているが、私には「日本の〈漢字〉とその本質――反ソシュール言語学への試み――」と「〈宛字〉の論」の新規執筆の理論的なものによく理解できないところがあった。具体的事例が豊富に盛られている反面、概念の定義や解説の表現に晦渋なところがあり、著者の気負いのようなものが気になった。親しく面晤することのできない後進の読者のために、十分言葉を尽して説く教育的な配慮を老練な著者に望む。

黒須重彦『漢字文化圏の諸問題――〈こえ〉と文字――』（武蔵野書院、92・4）は、書名に惹かれたが、私の予期していたものとは違っていた。著者の本領は『楚辞』の研究にあるらしいが、そちらの業績がどのようなものか知らない。本書では「漢字文化圏を考えるときの公式」なるものが頻りにもち出されているが、思いつきの域を出ているものとは見えない。その公式と称するものが特に漢字文化圏に限って適用しなければならない必然性も認められないように思う。公式や仮説を前面に押し出すのは、それが事態を説明する上で最も

合理的で有効な役割を果たすからにほかならない。それだけに細心緻密な計算のもとに構築・適用されなければ、気楽な自己満足に終わってしまいかねないのである。

石井勲『漢字興国論』（日本教文社、92・5）は、著者の教育実践から、漢字の早期教育の意義や文字としての漢字に対する高い評価などが述べられている。ただ、漢字の教育に執するあまり、言語運用能力全般に対する目配りが十分でない憾みがある。また、「真に文字と言へるものは漢字だけである」などとくると、「表語」の概念に関わる表現であるだけに、正確な書き方が望まれる。

マーシャル・アンガー『コンピュータ社会と漢字』（奥村睦世訳、サイマル出版会、92・9）は、「言語学者がみた第五世代コンピュータ」という副題が添えられており、漢字そのものを対象とした研究ではない。漢字仮名交じり文を使用する日本社会とコンピュータに関わる諸問題をかなり執拗に追究している。要約・紹介の困難なしろものであるが、日本のコンピュータ社会で今後漢字変換をより自在にする方向をとり続けることの得失および漢字というものにエネルギーや経費を殺がれる不経済を、強いＡＩ（人工知能）への悲観的評価をからめて繰り返し述べている。この方面に理解が欠けている私には立ち入ったコメントをする資格がないが、有資格者の反応を期待する。

加納喜光『漢字の博物誌』（大修館書店、92・11）は、同じ形の漢字を用いていても、中国と日本の間に指示する意味に差があることを、具体的な実質の相違を示すことのできる博物（草木・鳥獣・虫魚・飲食物など）の例をもって示したものである。また、漢和字典が犯してきた誤解の歴史をも手際よく示してある。

この期に阿辻哲次は次の二著を刊行した。『漢字のベクトル』（ちくまライブラリー、筑摩書房、93・3）と『教養の漢字学』（大修館書店、93・6）である。前者は、「字形のベクトル」「漢字教育と字書のうつりかわり」「漢字文化圏の歴史」の三章で構成された漢字学案内。後者は、講演の速記録を整理したもので、一般向けの読み物の体裁をとる。第六章の「現代日本の漢字文化」で、現代の漢字をとりまく状況について、異体字（略字など）やワープロを話題として述べるにとどまり、「漢字学」と銘打つにはいささか構成に偏りがあるように思われる。しかし、中国学の立場でなされる漢字研究を知るには手ごろな書であると言えよう。

世界の文字研究会編『世界の文字の図典』（吉川弘文館、93・8）は五百頁余を費して世界の文字を大部分手描きで紹介している。あとがきによれば近藤安太郎個人の仕事のようである。これを研究会の名で出版するのは謙抑の姿勢からであろうが、個人の責任回避にもなりかねない。

佐藤喜代治ほか八名『続漢字の泉』『続々漢字の泉』（河北新報社、92・7、93・7）は、漢字の来歴や用法、字訓・字義などに触れた読み物。さりげない書き方の中に、漢字をめぐる問題への多面的な対応が見られる。

野村雅昭・小池清治編『日本語事典』（東京堂出版、92・9）の文字・表記の本文見出し項目はわずか二十八に過ぎないが、基本的な概念を要領よく説いていて出色のものである。

『太田晶二郎著作集』がこの時期に全五巻をもって完結した。第五巻（93・1）にはユニークな「古文書のよみ方――異體字一隅――」が収められており、参照の便宜が増した。

二、字形・字体

仮名については佐藤栄作「カナ字形・字体についての基礎的研究II――「シ」と「ツ」をめぐって――」（『山手国文論攷』14、93・3）が、現代の片仮名「シ」「ツ」の実現形とその背後の個人字体の把握の問題を扱っている。彼にはまた「字形から字体へ――『観智院本類聚名義抄』の「ツ」とそれに付された平声点をてがかりに――」（『辻村敏樹教授古稀記念　日本語史の諸問題』、明治書院、92・3）もあった。

漢字を扱ったものでは、天沼寧「匚（はこがまえ）：匸（かくしがまえ）」（『大妻国文』23、92・3）、同「通用字体と略字体」（『日本語学』、93・9）、同「鉄：鉄」（『大妻国文』24、93・3）のようなものがあったが、笹原宏之の一連の字形研究、特に位相文字を中心とする国字研究が際立っていた。「画数に隠された意味――64画の漢字の周辺とその背景――」（『中国語学研究　開篇』10、92・5）、「字源説、字源意識、文字に対する意識が字体に与えた影響――「國」の異体字に関して――」（『国語学　研究と資料』16、92・12）、「位相文字の性格と実態」（『早稲田日本語研究』創刊号、93・3）、「JIS漢字と位相」（『日本語学』、93・7）と矢継ぎ早に魅力的なテーマで研究を展開している。さらに「地域文字の考察――地名に現れた日本語表記の時代差と地域差の一例――」（『文化女子大学紀要（人文・社会科学研究）』2、94・1）や「『國字考』の編纂意図の考察――国字研究の一系譜を探る――」（『国語学　研究と資料』17、93・12）といった論をものしていて、注目される存在である。

ほかに、藤田夏紀「『干禄字書』における正字・異体字関係の類型について」（『国文学攷』136）があった。

三、漢字の音訓

この分野はかつては最も論文数の多さを誇った時期もあった筈であるが、私の目に触れたものは意外に少なかった。

四十谷美佳「「四十」を「あい」と読むことについて」（『日本文学研究年誌（金沢女子大）』2、93・3）は、自身の姓を発端として展開した丹念な調査である。身近な姓に対する疑問と愛着が研究として実を結ばせた好例と言えよう。

竹浪聰「同訓異字小考――谷・谿・渓――」（『富山大学国語教育』18、93・11）は「タニ」を字訓としてもつ漢字によって日本語の漢字受容の一側面に光を当てようとしたもので、主として日・中の字義の対照に意を用いている。

木村哲也「いわゆる「改定音訓表」について」（『語学文学（北海道教育大）』30、92・3）および、鳥飼浩二「日本語再入門(1)　どうしたら『常用漢字表』で「日本」が「にほん」と読めるようになるか」（『日本語論』、93・11）は、表の適否に言及したもの。

平林文雄「漢字の慣用読みの問題――誤用の定着について――」（『表記』8、92・9）および、天沼寧「箝口令（かんこう）：緘口令（かんこう）」（『大妻女子大学紀要（文系）』25、93・3）は慣用読みを扱っている。「いつの時代かに誰かによって誤って用いられたものが定着し、慣用されるようになった」（平林）というが、その細かい事情が解明されないと概説書の切り取りと変らない。

四、文字論

私が読むことのできたのは次のものである。

鹿島英一「文字言語のソフトウェア」（『東北大学言語学論集』1、92・3）は、主として同文字異義語を世界各地の文字システムでどのように表記しわけているかを一覧し、八種の方法（1アクセント符号　2弁別点　3文法標識等を示す符号　4外来語用文字の導入　5合成語の標識　6送り仮名　7同文字語の判別点　8無音の文字）を挙げている。一言語だけからではなかなか気づかない表記の可能性を知ることができた。

服部隆「日本語における漢字の表意機能」（『福岡女学院大学紀要』3、93・2）は、二字表記語を例として、和語あるいは漢語が対応する場合の表意機能を考察している。

犬飼隆「言語の要素としての文字の位置」（『小松英雄博士退官記念日本語学論集』、三省堂、93・7）では、森岡健二の「文字形態素論」の再検討を行っている。この結果日本語における漢字使用では「（音声言語上で生産されて）存在する語を視覚的にあらわし、付加的な情報を盛り込むだけでなく、視覚を通して字体の側から音韻にaccessし意味を活性化して、語を生産することが可能」なことから、形態素に近い機能を認め、これを「音象徴」に比定して論じている。

佐竹秀雄「経済性からみた漢字」（『言語』、93・12）は、漢字を使う前提に立った上で、経済性・効率の観点から問題の所在を現実的に指摘している。そして漢字使用の最適化をはかるために、漢字のもつ長所短所を変数とした「関数」を考え、変数間の関係を明らかにする研究が必要であると述べている。

以上、数の上では少ないし、活発な論議があったとも言えないが、着実な歩を進めてはいると感じられた。

五、表　記

この分野も研究の蓄積のあるところであるが、外来語の表記に世の関心が向いている割には、この期の論考の数は多くはなかった。

小林一仁「国語表記の現状と将来」（『文部時報』、92・2）は概説的な内容のもの。

松崎寛「文字と表記」（『言語行動論報告』3、93・5）は、「現代かなづかい」のゆれおよび「ヴ行」の表記に触れているが習作のようである。

岡田袈裟男「語種・表記・表現媒体――書き表わし方へのこだわりと嶋岡晨『ネオロジスム詩集』――」（『国文学解釈と鑑賞』93・1）には、語種と言葉の書き表わし方との関係がごく単純に処理できるものではないとして、こだわる詩人嶋岡晨の詩集を例に説いている。

高松正毅「表現としての表記――長野まゆみ著『少年アリス』の用字法――」（『国語学　研究と資料』17、93・12）では、学校教育とは別に、個人が意図的に学んで身につけた文字遣いが意味をもつ場合のあることを、新しい世代の作家長野まゆみを例にとって示している。

木村睦子「国定読本の語彙と表現」（『日本語学』92・2）は六期にわたる国定読本の漢字仮名交じり文を調査した結果が示されている。仮名の部分については、①片仮名のみ　②平仮名のみ　③平仮名を基本にして外来語を片仮名にする、のいずれかであるとして、各期の実態を手際よく整理して述べている。また、拗音・促音を表わすヤ・ユ・ヨ・ツの大字・小字の別や一期特有の棒引き仮名遣いにも言及している。

仮名表記に関しては、丹保健一「エ列長音の表記をめぐって――「あ

かんべえ」か「あかんべい」か――」（『金沢大学・文字研究』21、92・7）があった。エ列長音の平仮名表記の実態を現行の辞書によって示すとともに、仮名遣いのゆれあるいは逸脱の要因について考察している。

泉文明「二重表記の現在――短歌・俳句の表記の調査――」（『日本語学』93・3）は、先期に見た大島中正の「漢字仮名並列表記」とほぼ同じ現象を扱っていると見られる。語形を振り仮名で示したり、括弧の中に示したりして、曖昧さを排除する書き手の意思をあらわしている表記法を言う。これを新聞掲載の短歌・俳句と「天声人語」・社説で比較している。

外来語の表記には、小林篤志「外来語の発音と表記について」（『言語文化研究（東京外大学院外国語学研究科）』9、91・3）を先期に発表されたものの拾遺として挙げておきたい。現在の日本語に見られる外来語特有の音結合を整理し、その表記の実情と問題点を述べている。

早野慎吾「外来語の発音と表記――「ティ」「ディ」「ジェ」について――」（『静大国文』36、92・4）は、茨城県玉造町における外来語発音の変化を扱っている。

カッケンブッシュ寛子「外来語分析の課題――促音化の規則と例外について――」（『日本語研究と日本語教育』、名古屋大学出版会、92・10）では、英語の音形から外来語の音形へと変じたものを、英語の/CVC/と/CV：C/（CV：は長母音と二重母音を表わす）の構造をもつ単語に限定して分析を施し、一般的な規則と例外の扱い方について言及している。明晰でわかりやすい論として読んだ。

松崎寛「外来語音におけるゆれの類型――辞典類の表記を中心として――」（『言語学論叢（筑波大学一般・応用言語学研究室）』10-12、92・10）、同「外来語音の表記のゆれに関する定量的研究」（『東北大学文学部日本語学科論集』3、93・9）は、ともに辞典類の外来語を調査し、ゆれを考察している。ある拍が日本語寄りか外来語寄りかは語によりかなり異なる実態を指摘している。

この期には中国・韓国・シンガポールなどの漢字表記と対照した論考もみられた。

王敏東「外国地名の漢字表記について――「アフリカ」を中心に――」（『語文』58、92・4）、同「外国地名の漢字表記をめぐって――「オーストラリア」を中心に――」（『待兼山論叢（文学篇）』26、92・12）、同「意訳された外国地名について――「紅海」の漢字表記をめぐって――」（『国語語彙史の研究』13、93・7）は、一連の外国地名漢字表記についての調査報告である。日・中の表記例を丹念に収集しているが、この営みを「地名の漢字表記を研究していく方法を探る一つの試み」と漠然と述べ、実態を示すだけにとどまっているのは残念である。

曹麗萍「日中同形異義漢語について」（『日本文学研究会会報（東洋大学短期大学日本文学研究会）』7、92・3）は日中間のコミュニケーションの上でははやくから常識に属していることがらを並べたに過ぎず、失望させられた。

泉文明「日本語教育から見た二重表記――日韓両言語の二重表記の対比――」（『日本語教育』78、92・11）は、韓国の副表記には括弧の形式が同音異義語を区別する目的で用いられ、日本ではルビと括弧の両方が主として漢字の語形（読み方）を明示するために副表記として行われていることを述べている。

鹿島英一「日華両語における外来語の表記法」（『東北大学文学部日本語学科論集』3、93・9）は、シンガポールにおける華語での外来語

表記処理法が日本語の場合とよく似ているとし、日本語の片仮名と華語の表音字の異同について論じている。

六、情報処理と漢字

山田尚勇(研究代表者)『東アジア文字データの国際交換に関する実証的研究』(学術情報センター、92・3)は、科学研究費補助金「国際学術研究共同研究」研究成果報告書である。学術情報システムの改善に資するため、漢字コードの国際的標準化の可能性を探って、ISO10646というユニバーサル符号の制定に関与した。宮澤彰「東アジア地域の漢字コードの統一をめざして」(『しにか』92・2)は、この標準化への動きを平易に解説したものである。『しにか』(93・2)にも「漢字コードの国際標準化」が特集され、制定の意義とそれに至る経緯、コードの概要などが掲載されている。

松岡榮志はこの国際規格の論議に積極的に関わっている一人と目されるが、「漢字と漢語――日中言語対照研究の視点から――」(『文化言語学』、三省堂、92・11)で、漢字の形として扱っているのは、極めてスタティクなもので、日中両国で手書きで通用している形ではない。そこで字形の微差を問題として述べているが、文字のデザインの範囲にとどまるようなものまでが「大きな問題」として意識されているところにコンピュータ社会の窮屈さがある。

星野聰「異体字をどう考え、どう処理するか?」(『しにか』、92・2)も、字形の微差を意識し過ぎているように感じた。しかし、市川浩(『國語國字』157、92・11、『しにか』93・2)のような極端な入力・印刷の主張とは異なり、使用主体本位の柔軟さがある。

豊島正之「「JISに無い字」をめぐって」(『しにか』92・2)は、文献学的に厳密なテキスト表現をする上で、コード表にない字をコード表にある字を用いてする際の現実的な方法を示してある。正鵠を射た論だと思う。

七、日本語教育

具体的な日本語教育の場でどのように漢字を扱うかとか、教育を受ける留学生たちがどのような現状(水準)にあるかとかの実際的な問題を述べたものは夥しい数にのぼるが、それらについては今触れない。日本語教育の基礎研究と思われるものに限って一瞥する。

野村雅昭・山下喜代「日本語教育のための漢字・漢語データベース」(『講座日本語教育』28、93・3)には、標題のものの概要が述べられているが、漢字ファイルに属性(部首・画数・字源・字音・字訓)・字種(学年別配当・国語施策・字典コード)・頻度(雑誌・新聞・中高教科書・日本語教科書)の三大情報を、漢語ファイルに属性(品詞性・語構成・意味コード)・語種(出自・中国語)・頻度(雑誌・新聞・中高教科書・日本語教科書・児童作文)の三大情報を盛り込む仕様としている。こうしたものがデータベースとして利用できるならば、その恩恵はかり知れないものがあろう。

武田明子「科学技術日本語テキストにおける基本漢字の分析――理工系大学院留学生の専門書読解のために――」(『計量国語学』19-2、93・9)は、学習漢字の数を決定するために理工系教科書の漢字を各分野にわたって調べ、ウェイトランキングで漢字の順位を見、次のような結論を得ている。すなわち、非漢字圏の理工系留学生にとって必要な漢字は専門書の90%をカバーする480字であり、これらは三つの階層に分かれていて、第一のは日本語読解に、第二のは専門書読解に必要

な基本漢字であり、別に第三の階層として専門用語を形成するための漢字があること、第三の階層のものは学習者を悩ますほど多い数ではないことなどである。こうした知見が実際に活用されるよう期待する。

加納千恵子「漢字の造字成分に関する一考察――日本語教育のために――」（『文藝言語研究（言語篇）』22、92・9）では、漢字の造字成分抽出の必要性について基本的な考え方を提示して、部首以外に、造字成分となる字形要素をも重視すべきことを説く。それを受け、同「漢字の造字成分に関する一考察(2)――形声文字の音符について――」（『文藝言語研究（言語篇）』24、93・8）では、現代日本語において音情報を担っている造字成分として十分機能していると見られる音符をもつ漢字を「現形声文字」とし、その音符のうち常用漢字の範囲内で効率的な漢字学習に有用な知識と考えられるものを特定し、日本語教育に役立てることを提案している。

大島中正「異音同表記語――その種類と問題点――」（『同志社女子大学日本語日本文学』4、92・10）は、「くにざかい」「こっきょう」の二通りに読める「国境」のような表記について述べたもので、「漢字仮名並列表記」を別の角度から扱って日本語教育に資するということらしい。

玉村文郎「日本語における漢字――その特質と教育――」（『日本語教育』80、93・7）は、わかりやすく平易に説かれた概説であるが、こうした概説を繰り返し示さなければならないほど、日本語教育の実際の場での教師の恣意による漢字指導も多いのであろう。

趙南星「韓国人日本語学習者による外来語表記の誤り――日本語話者による評価を中心として――」（『日本語教育』78、92・11）に、日本語話者がエラーに対して厳しく評価する順が、母音、濁音、撥音、長音、促音であることを報告している。日本人自身の外来語感覚を知る上でも、韓国人日本語話者とのコミュニケーションの上でも寄与するところがあると思う。

八、心理学

認知心理学や教育心理学で文字・表記を扱っている論文は、私の手許に十五篇ほどある。この中から四篇だけ挙げる。ほかは展望の範囲外であったり、私の手にあまるものである。

瀬川武美「読速度と内容理解度から見た縦書きと横書きの読みやすさに関する研究」（『読書科学』36-3、92・10）。文字の大きさ、一行の文字数、文字および行の間隔が同じ条件下では、横書きと縦書きという配列形式の違いからくる「読みやすさ」に有意差がないことを確認している。

守秀子・大澤靖彦・川島一夫・守一雄「ワープロ作成書の印字書式の見やすさについての実証的研究」（『読書科学』36-4、92・12）では、文字間隔は詰まっている方がよく、行間隔はあいている方がよいという一般原則を見いだし、さらに文字間と行間の間の相対的な関係で読みやすい比率とはどういうものかを調査検証している。

齋藤洋典「漢字をめぐる連想機構」（『日本語学』93・8）は、認知心理学の立場から、知識の組織化・検索の特徴を漢字を素材にして考察したもの。

田中博正「仮名と漢字の認知時間に及ぼす言語的発声活動と打叩活動による葛藤効果」（『川村学園女子大学研究紀要』3-2、92・3）には、漢字認知には脳の右半球の機能が優位に働きながらも、漢字の

意味認知には仮名認知と同じく言語中枢機能が存在する左半球が脳梁などを通じて関与しているという考えを示している。

九、おわりに

かつて山田俊雄は「研究論文は、その目標と方法とが明確で、しかもオリジナリティーとプライオリティーの点で誇るべきものを必ずもたなければならないこと位は、自明のことではないか」と苦々しく述べたことがある（『国語学』90、72・9）。今期を一望してみて、やはり似たような思いを述べなければならないようである。一見、研究は隆盛の途にあるようであるが、全般的には先期の展望に採り上げられたテーマのなぞり、あるいは繰り返しと思われる論考が多かった。研究論文の多さ、領域の広さ、対象の多様さ、情報量の多さなどに研究者が眩惑され少々浮き足立っていると感じられたことも一再ならずあった。しかし、着実に自身の問題を掘り下げ、資料を提示し、新しい知見を獲得している研究にも接することができたのも事実である。

情報の僻地にあって、見るべきものを見落としているのではないかという思いは拭い去れないが、期限というよんどころない事情で見切りをつけることにする。無理解からの読み違えなど非礼な点があることを恐れるが、お赦しを乞いたい。

——秋田大学助教授——